連載56 地域密着進める

女子大学の人づくり

宮城学院女子大学
学長
長谷部　弘

宮城学院の女子教育 たえず原点に立ち戻りつつ

宮城学院女子大学の女子教育について、宮城女学校の初代校長であったプールボー女史の働きを振り返りながら語ってきました。出発点＝原点を確認するためです。それは、伝統保持の守旧的な考え方、行動様式に見えるかもしれませんが、実はそうではないのです。歴史的な出発点を教育事業体の原点に位置付け、新たな状況が生起する中で繰り返し立ち戻り、基本姿勢を確認し、新たに創意工夫の働きへと立ち向かっていく前向きの作業なのです。それは、社会学や言語学の世界で用いられる「再帰的（recursive）」という言葉に示されるような考え方、行為に似ています。新たな状況の中で過去を振り返りながら自らを修正していく…。イギリスの社会学者ギデンズらが近代化の実相を「再起的近代化」として説明しようとしたあの「再起性」のことです。

過去の拘束に囚われることなく革新的な企てを実現していく精神態度は、経済学者シュンペーターの「技術革新（innovation）」のように、社会発展を支えるものとして高く評価されています。しかし、同時にそれは冒険的なリスク、場合によっては取り返しのつかない手痛い失敗がつきものであるという事実にも目をむけるべきでありましょう。出発点を原点として省み、自分の立ち位置をたえず検証確認しながら新たな企てに取り組む、という再起的活動は、組織の自己同定化に際しても、過去の見えにくい諸資源を新たな活動に投入していく作業としても、意味のある行為です。

繰り返しますが、宮城学院女子大学の教育事業体としての存続発展は、その出発点である宮城女学校に立ち返りつつ、着実に成し遂げられていくべきものです。看ずるに、その原点は、1886年9月の制度上の学校設立時にではなく、その2年後、1889年7月5日に行われた宮城女学校献堂式の時に求められるべきではないかと考えます。プールボー校長が全身全霊を注いで建設に漕ぎつけた新校舎に自らの教育事業の働きを仮託し、真の創設者であるべき主なる神へと献げた記念の式典の時です。その様子を本国ミッション・ボードに報告する中で、彼女は、「今、私たちは当地に根を下ろした気がいたします。約定の修正という形で何が起ころうとも、女学校は仙台に地歩を築いたのです。そして確実に、この学校はやがてこの地において良い影響力を発揮するでしょう」と述べています。東北の地、仙台に根を下ろして女子人材育成の働きに励んでいく、その基本姿勢が明瞭に示されているのです。

現在、日本の女子大学の数は七十余を数えます。18歳人口の長期的減少傾向を受けて、この2年ほど、女子大学の存続問題が話題です。男女共学化へと舵を切った女子大学も、この間、1割近くあります。そのような中で宮城学院女子大学も、時代と地域社会のニーズに寄り添いながら、女子大学として改革改組に取り組み、改善していこうとしています。

現在、宮城学院女子大学は、宮城県を中心とする東北六県からの女子入学者を迎え、同じエリアに女子卒業生を送り出す、という高い地元残留率を持つところに一つの特色があります。そこに、主なる神に新校舎を献げた往時の姿を重ね合わせ、見事なまでの原点堅持の事実を発見するのはさして難しいことではありません。2026年に創立百四十周年を迎えます。これからも、たえず原点に立ち戻りつつ前向きに歩んでいく精神を持ち続けていければと願っています。

長谷部　弘（はせべ・ひろし）1955年生まれ。福島市出身。東北大学経済学部、経済学研究科修了後、同学部助手、教養部講師、国際文化研究科助教授を経て、99年に経済学研究科教授。2021年定年退職し東北大学名誉教授。23年4月から宮城学院女子大学学長。専門は日本経済史。博士（経済学）